

大学博物館（ドージャー記念館） 講堂での神学部チャペル

小林 洋一

問われたことはないが、もし、神学教育の三本柱は何かと問われたら、「それは3Cです」と答えたい。そして、Class(での授業)、Church(出席、奉仕)、そしてChapel(参加)の三つを挙げたいと思う。神学部で学ぶ者にとってチャペルは重要であり、それは教育・訓練の場であり、そして霊的涵養の場である。

神学部チャペルは、神学部教員と神学生の共同で運用される。通常、司会、奏楽は神学生が担当し、宣教（説教）は教員も担当するが、その主たる担い手は神学生である。この神学部のチャペルに2006年度後期より一つの進展があった。それは、新装なった大学博物館（ドージャー記念館）講堂での神学部チャペルの開始である。

*

2001年4月、神学部は、それまで45年間の歴史を刻んだ福岡市城南区干隈のキャンパスから、早良区の西新キャンパスに移転、統合された。それ以来、昨年の前期までの約5年間、神学部チャペル・プログラムは、学期中の毎月曜の午前11時～12時、本館Ⅱのステンドグラスの美しい小チャペル（今年度6月より西南子どもプラザ施設）でなされ、火曜～木曜は大学全体のチャペルに合流するという形をとってきた。それと共に、毎月、最終の金曜夜7時より、室見の神学寮集会室でチャペルを守ってきた（この月1回の神学寮でのチャペルは、干隈時代に日常的であった神学生家族のチャペル出席を、せめて月1回でも可能にしたいとの願いから始められた）。このよう見えてくると、神学教育の三本柱の一つと位置づけるチャペルについても、月曜の神学部独自のチャペル、火曜～木曜の大学チャペルへの合流、月1回の神学寮でのチャペルと、三本立ての形で行っていることになる。

*

さて、月曜の神学部チャペルであるが、冒頭で触れたように、大学博物館設置準備委員会の承認のもと、昨年度の後期の9月25日（月）より、大学博物館（ドージャー記念館）2階講堂で行うことが可能となった。この講堂は、2003年4月、西南学院中

学校・高等学校が百道浜校地に移転するまで、永年にわたって中高のチャペルとして使われていたところである。黒塗りの年季の入った長椅子の背には、落書きがそのまま残されている。人名、講話と関係あるらしき文言、絵、判読不明の語句等々、これまでの幾多の卒業生の歴史を感じさせるものである。

博物館1階には、キリスト教の歴史・文化を知る上で貴重な資料が展示され一般公開されている。博物館来館者にもチャペルへの参加は開放されており、自由に見学あるいは参加していただいている。このことが、博物館1階展示室でキリスト教の歴史と文化について見学された来館者の方々にとって、数千年に及ぶ伝統を引き継ぐキリスト教礼拝の一端に触れていただく機会ともなればと願っている（博物館的には、私たちは生きた歴史的展示物！）。最近では、たまたまチャペルの時間に来館された方が、後部座席に静かに座っておられる姿も目にするようになった。

干隈キャンパスから西新キャンパスへの移転より5年、このドージャー記念館講堂でのチャペルという落ち着きどころを得て、ようやく神学部の新キャンパスへの統合が整ったとの感慨を深くさせられている。

*

講堂正面、向かって左側、バルコニー上方に、大学博物館設置準備委員会の承認を得て、小さな十字架が掲げられている。この十字架は干隈校地の神学部チャペルの梁の一部から作られたものである。干隈のチャペルの梁から分かれた十字架は、干隈の45年に及ぶチャペルの伝統を継承するシンボルとも言える（干隈の神学部チャペルの梁から作られた十字架は、他に、室見の神学寮礼拝室、福岡国際キリスト教会礼拝



旧干隈の神学部チャペル（1987年12月クリスマス礼拝）

堂、福岡西部バプテスト教会礼拝堂、そして静岡にある日本バプテスト連盟直属事業体である天城山荘の祈祷室にも掲げられている)。

この博物館講堂は、古くは1949年に大学が新設されてからの3年間、大学のチャペルとして使用された経緯がある。1952年に旧1号館が完成すると、チャペルは講堂から3階大教室(303号)に移った。西南学院バプテスト教会が礼拝に使った時期もある(1950-1952年)。西南の歴史の中で現博物館講堂は連綿とチャペルとして使用されて来た永い伝統を持つ由緒ある場所である。奇しくも神学部がこの講堂でチャペルを持つことのできる巡り合わせを感謝し、この講堂でのチャペルの火を大切に守り続けて行きたいと願っている。

*

今年3月末、この講堂に辻オルガン建造による小型のパイプオルガンが設置される予定である。偉大なオルガン・ビルダーであった辻宏氏は、惜しくも2005年12月22日に亡くなられた。長野市の県町教会のオルガンをモデルとするこのパイプオルガンの設計・企画は、辻宏氏による最後の作品となった(辻オルガンの作品としては第82号)。本学は、すでに辻オルガン建造のパイプオルガンを大学チャペルに持っているため、これで辻オルガンのパイプオルガンを2台所有することになる。

新学期が始まる2007年4月以降、パイプオルガンによる奏楽をもって神学部のチャペルが持たれることになる。このパイプオルガンの奏楽により、チャペルが一層豊かに充実したものとなることを期待したい。

*

このパイプオルガンについて、辻オルガン代表の辻紀子氏より以下のような紹介をいただいた。

1. 辻オルガンの特徴は、神の創造された最も美しい楽器「人の声」を豊かに支え、声と共に歌う讚美の楽器として建造されている。
2. 最も良い材料を選び、合板、プラスチックは使わない。笛は鉛と錫の塊を工房で溶かし、板にし、手かんなでけずり、裁断し、一本一本、手作業で笛に制作している。
3. 化学接着剤は数百年の使用テストを受けていないため、伝統的に数百年持つ「にかわ」を接着剤として使用している。
4. 「美しく、良く、気品ある」音を作るため、音にかかわるあらゆる部分を無垢の木材を野外で数年、屋内で数年、自然乾燥し、ヴァイオリン製作者が木を選ぶように厳選・管理して用いている。



設置されたパイプオルガン (2007.4.16)

〈オルガンの仕様〉

手鍵盤及び足鍵盤、9ストップ

パイプ総数 550本

MANUAL II C - f'' 54 keys

PRESTANT (C-Gs from GEDACKT)	8'	45 pipes
OCTAVE	4'	54 pipes
SESQUIALTER (c')	II	60 pipes

MANUAL I C - f'' 54 keys

GEDACKT	8'	54 pipes
RHORFLOETE	4'	54 pipes
OCTAVE	2'	54 pipes
MIXTUR	III	145 pipes
DULCIAN	8'	54 pipes

PEDAL C - f' 30 keys

SUBBASS	16'	30 pipes
---------	-----	----------

高さ 4,130mm 巾 2,620mm 奥行 1,430mm

パイプ

パイプ制作は、ヨーロッパの伝統的工法によりメタルシート製作からパイプ完成まで手作業により辻オルガンで行われる。

風箱及びアクション

北海道及び白川産の檜材、もみ材を自然乾燥し使用するので、音が良くまた日本の気候に良く順応し、故障も少なく弾き心地が良い。

オルガンケース

もみ材を使用し、オイルステインフィニッシュとする。ベニヤ板、プラスチック等を使わず、無垢の材木を使用しているため、優れた音質と正直で気品のある外観を与える。

音高と調律方法

音高は現代標準の $a' = 440 \text{ c/s at } 20^\circ\text{C}$

調律方法はバッハの愛用した平均率（WERKMEISTER 第3調律法等）に準じた辻オルガン独自の調律法による。

送風

ふいごと電動送風装置を備える。

*

最後に、このパイプオルガン設置の経緯について簡単に触れておきたい。このパイプオルガン設置の計画は1998年3月の理事会による大学2号基金設定にさかのぼる。その2号基金は神学部で捧げられた積立金が基礎になっていた関係で、神学部内にパイプオルガン設置委員会が設けられ、その委員会が機種、サイズ等の選定を行って、その設置準備を進めてきた。

準備の過程で、パイプオルガンは将来にわたって大学全体のために用いられるべきより充実したオルガンになるべきだとの趣旨で、設置費用の増額が理事会によって認められた。それは当初の計画よりオルガンのサイズが大きくなることを意味していた。このサイズが大きくなることについては、神学部の責任者である私の連絡ミスで、博物館管理運営委員会との協議なしに進められ、博物館管理運営委員会に多大の迷惑をかけることとなった。博物館管理運営委員会は、サイズの大きくなったパイプオルガ

ンが、講堂の美しいシンメトリーの景観を大きく損なうのではないかとの危惧を抱きつつも、最終的に設置承認を決断して下さった。

その設置承認が苦渋の末の決断であったことを知る者としては、設置されるパイプオルガンが講堂のシンメトリーの景観の見事さを損ねないだけでなく、パイプオルガンが真近に見られる博物館ということで、博物館の魅力が一層高まればと願うばかりである。(2007.3.6)



パイプオルガンを設置した講堂全体 (2007.4.17)